

減りゆく根子岳の草原——冬景色から見えること——

この冬は雪不足が続き、菅平のスキー場でも懸命の運営が続いていましたが、いよいよ本格的な冬を迎えるようになりました。なじみ深い雪化粧の山が見えるようになります。雪の野山を眺めると、植生の違いが楽しめます。草原は白色です。落葉樹林は枝の向こう側が透けて茶色の中に地面の白が少し混じります。常緑樹林は濃い緑色にのっぺりと覆われています。

左の写真は、リフトの状況から1970年頃と推測される根子岳の様子です。下の写真は、同じ構図になる場所を探し回つて菅平の太郎山から2015

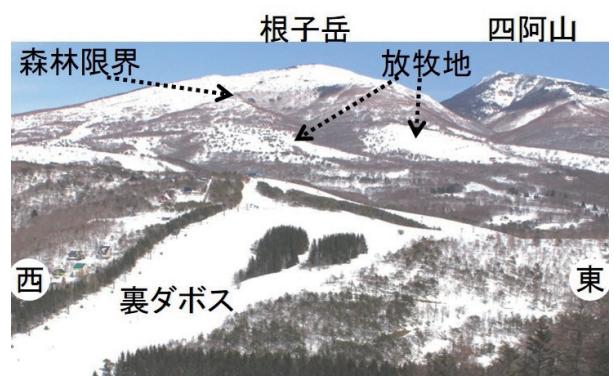


1970年頃の撮影と推測される根子岳
菅平高原誌(1990年、真田町教育委員会発行)より許可を得て転載。

年に私が撮ったものです。この四、五年間に景色がすっかり変わっています。以前の根子岳は真っ白です。山頂まで牛馬を放して牧場を営んでいたため、根子岳はかつて山全体が草原だったのです。しかし戦後になって家畜の数と放牧面積が急激に減少し、放置された草原に自然に木が生え、森になつていきました。根子岳よりも上の山頂付近と西の尾根沿い、そして狭くなつた放牧地とスキー場にだけ草原が残され、それ以外の場所

森林限界よりも上の山頂付近と西の尾根沿い、そして狭くなつた放牧地とスキー場にだけ草原が残され、それ以外の場所

森林限界よりも上の山頂付近と西の尾根沿い、そして狭くなつた放牧地とスキー場にだけ草原が残され、それ以外の場所



2015年3月撮影の根子岳(田中健太撮影)

化し、日本の陸地の1%を下回るところまで減りました。これはおそらく数十年の歴史の中で初めてのことです。

太古から続く生態系である草原では、数多くの生き物が命をつないできました。草原自体が消えてしまいそうになります。草原では生き物の種類が大きく違い、両方が混じることで豊かな生態系になります。そして草原の減少はとにかく切迫しています。わずかに残された草原でも、急速緑化や畜産に便利な外来牧草が幅を効かせています。そんな中で、根子岳から菅平にかけての牧場やスキー場は、在来植物が咲き乱れる草原を楽しめる場所になっています。私の研究室では、草原にどんな手入れをすれば生き物が豊かになるのか調べています。しかし豊かな草原を残すには、それが観光・畜産・スポーツなどの経済価値に繋がるような仕組みが望れます。何か良い知恵はないものでしょうか?

(田中健太)

菅平高原で またまた 新種発見!!



写真左
本種をトラップで確認し、歓喜する
長澤君

写真右
新種ホソヒラタオオズナガゴミムシ

この度、オサムシ科の一種「ホソヒラタオオズナガゴミムシ」が菅平高原から新種として記載されましたので、ご報告いたします。本種は岩石が堆積した場所(崩壊地)の地下から発見されました。複眼の著しい退化、薄い体色(写真右)など、地下の暗闇に適応進化した特徴を有しています。

近年、崩壊地の地下は、未知の節足動物が数多く存在する、研究者にとって興味深い環境であることが分かつてきました。そこで当時学部生の長澤亮君と私とで、中部山岳地域を中心に、世界的にも前例のない大規模な(4地域合計29崩壊地)地中生昆虫相調査を行いました。方法は崩壊地に深度50cmの穴を掘り、昆虫誘引罠を設置、1~3ヶ月後に回収するという体力と時間のかかるものです。

調査中、採集が上手くいくのかという不安で、精神的に追い込まれていただけに、筑波大学菅平高原実験センター内や峰の原高原で本種が多数採集された時の喜びはひとしおで、捕獲を確認できた瞬間の長澤君の嬉しそうな顔が目に焼き付いています(写真左)。その後、分類学者である伊藤昇さんによつて、本種はいずれの既知種とも形態的に異なるこ

とが確認され、新種として共著論文で発表し(画像使用をご快諾いただいた日本昆虫分類学会に深謝します)

とが確認され、新種として共著論文で発表し

(小瀬隆弘)

¹⁾ N. Ito & T. Ogai (2015) A New Species of Macrocephalic Carabid from Nagano Prefecture, Japan (Coleoptera: Carabidae: Pterostichini). Japanese Journal of Systematic Entomology, 21 (2): 271-275.

